

附 小高神社本殿下（上村古墳群） 発掘調査報告書

例言

- 一・本書は、千葉県袖ヶ浦市滝の口四四九番地に所在する上村古墳群（遺跡コード・SG一〇八）の発掘調査報告書である。
- 二・発掘調査は平成二十四年四月二十三日から同年五月二十五日まで行い、整理作業を平成二十五年四月十五日から四月二十六日まで袖ヶ浦市教育委員会が行った。
- 三・発掘調査は生涯学習課文化振興班 桐村久美子・田中大介・前田雅之が行い、整理作業および本書の執筆・編集は、桐村が行った。
- 四・本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 二五,〇〇〇分の一地形図 「木更津」「上総横田」
 - 第2・3図 袖ヶ浦市教育委員会 平成二十一年 上村古墳群地形測量図
- 五・今回の調査に伴う記録図書類や写真類及び出土遺物は、袖ヶ浦市教育委員会にて保管している。
- 六・挿図の縮尺は各図に明記し、方位は座標北とした。

序章 調査に至る経緯

解体後の小高神社本殿下から基壇が発見されたとの報告を受け、発掘調査の実施に至った。現本殿が建設されたとされる江戸期の前時代の建造物遺構の検出、現本殿の江戸期等における覆屋の有無および小高神社鎮座以前に古墳が存在したか否かを明らかにする目的もあつた。

第二章 周辺の遺跡

小高神社が位置する標高約六十三mの台地上には上村古墳群が展開し、円墳十二基が現存するとされるが、これまで古墳の発掘調査を行っていないため詳細は不明である。平成二十一年度に神社の改築に伴って小高神社境内の発掘調査を実施しているが、古墳の周溝等は確認できなかった。上村古墳群は、平成二十一年度に袖ヶ浦市教育委員会が、測量調査を行っている。

小高神社の神職を代々務めた筑紫家の屋敷跡である神社北側は、縄文時代中・後期の遺跡である大作遺跡が広がり、さらに北側には大作古墳群が存在する。平成二十一年度の小高神社境内確認調査の際、大作遺跡から連続する神社境内北側のトレンチで縄文時代後期～晩期と推定される竪穴住居を確認し、複数のトレンチから縄文土器が出土した。

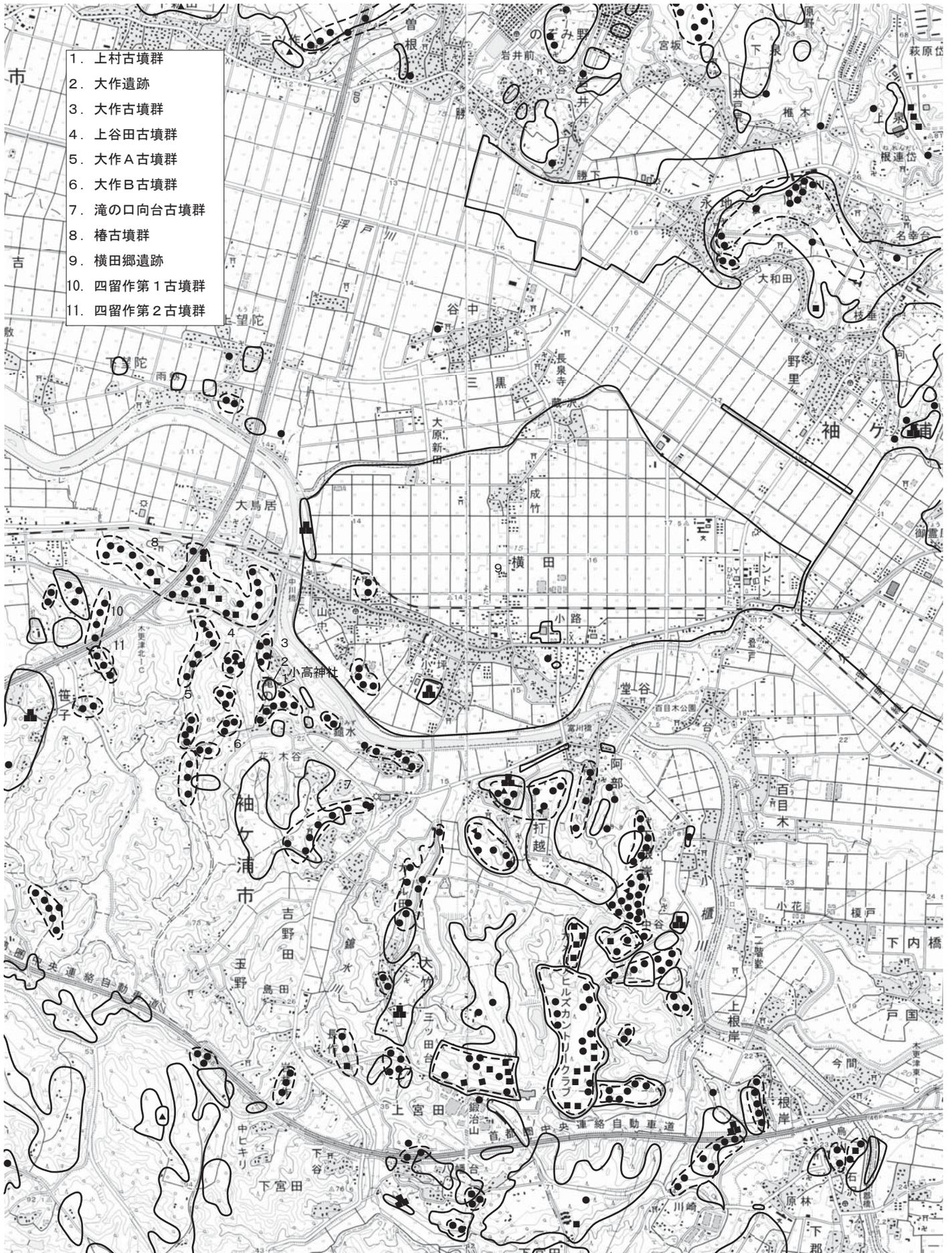
大作古墳群は、本来上村古墳群とは一つの群を構成すると考えられている。これまでに円墳6基の発掘調査が行われており、うち1・2号墳は五世紀終末に比定され、1号墳からは鉄銚・刀・刀子・鉄鏃等の鉄製品が多く出土し、2号墳からはガラス小玉・管玉等が出土している。六世紀中頃～後半と考えられている3号墳からは、耳環・刀子、須恵器の大型壺と坏等が出土している。周辺は大作古墳群同様に、祝崎古墳群・四留作第一古墳群等、古墳群の始まりが5世紀代に遡る古墳群が多く存在し、上村古墳群の性格を考える上で参考となるものは多い。また、上村古墳群の西側には上谷田古墳群・大作A古墳群・大

作B古墳群・馬場作古墳群が存在し、その一部について平成十九年に袖ヶ浦市教育委員会が確認調査を行っている。

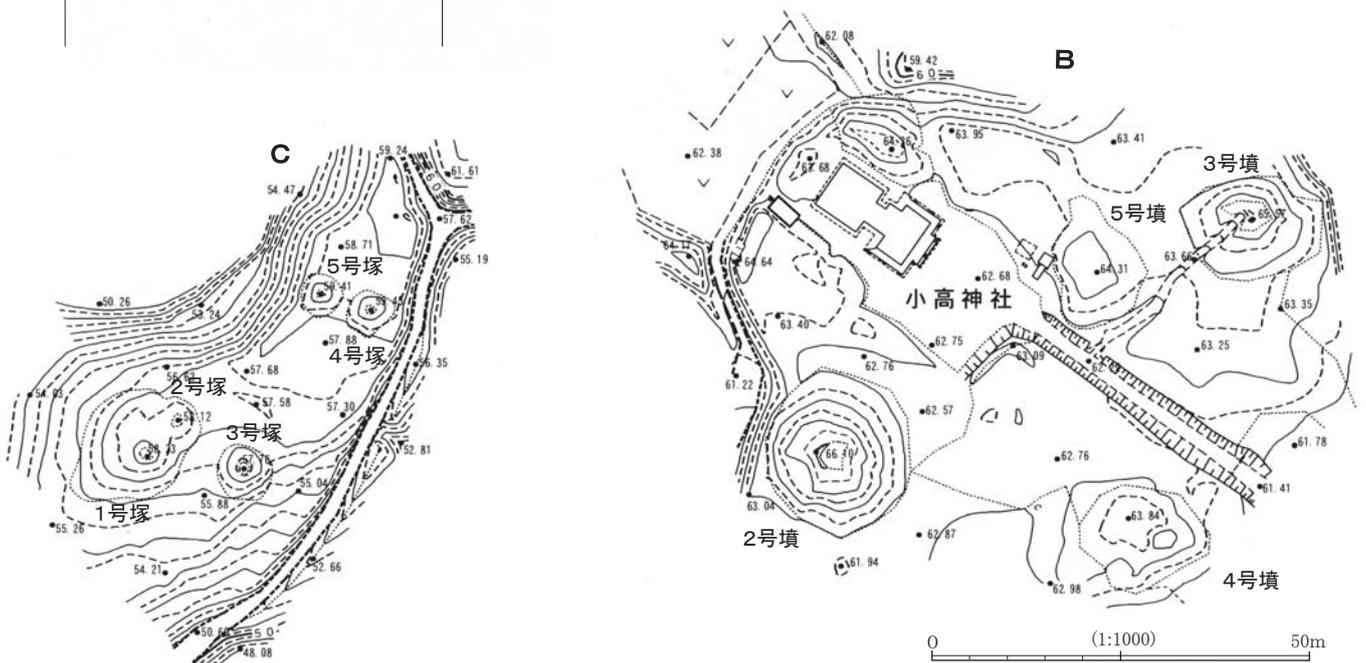
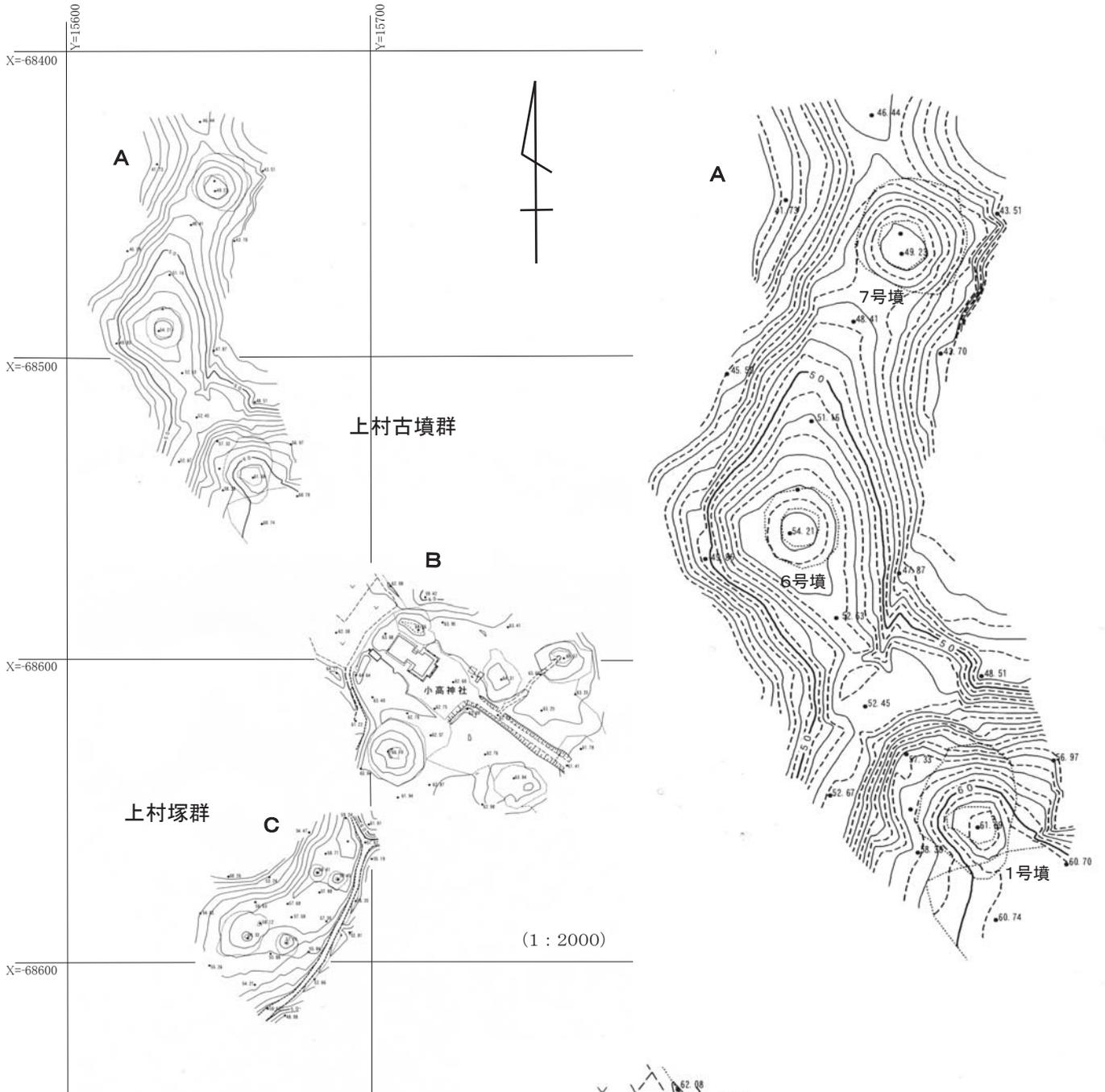
上村古墳群の北側には椿古墳群、南側には滝の口向台遺跡・滝の口向台古墳群が存在する。椿古墳群は木更津市と袖ヶ浦市との市境にまたがって展開する古墳群で前方後円墳四基を含む六十五基以上からなり、これまでに三十六基の発掘調査が行われている。椿古墳群第3号墳は古墳時代前期の方墳で、二基の埋葬施設のうち中央の第一主体部から鉄製槍・剣・銅鏃・管玉・ガラス玉が出土している。また、墳丘裾部から、東海地方東部の大廓式の大型壺が出土している。第3号墳の調査時には、第3号墳以外に十基の古墳が調査されているが、他はすべて後期の古墳で、うち一基が前方後円墳、ほかは円墳である。前方後円墳の第8号墳からは、二つの小環を伴う鉄釧が出土し、第9号墳からは銀象眼鏢直刀が出土した。他の古墳も勾玉・ガラス玉・直刀・刀子・鉄鏃・須恵器・土師器等、遺物は豊富に出土している。

滝の口向台遺跡は、縄文時代早期・中期～晩期、弥生時代、古墳時代前期～後期の包蔵地として周知された遺跡で、台地の東端部分は(財)千葉県文化財センターにより発掘調査が行われ、縄文時代竪穴住居、弥生時代中期方形周溝墓・環濠・平場遺構・土坑、弥生時代後期竪穴住居・土坑墓・環濠、古墳時代前期古墳、古墳時代後期土坑墓を検出し、旧石器時代・平安時代・中世の遺物も出土している。台地の北端は、小高神社の南側に神社と谷を挟んで向かい合う位置にある。ここで昭和初期に子持ち勾玉・滑石製紡錘車・双孔円盤・白玉・石鏃などが採集されており、発掘調査は行っていないので詳細は不明であるが、祭祀遺跡としての可能性が指摘されている。

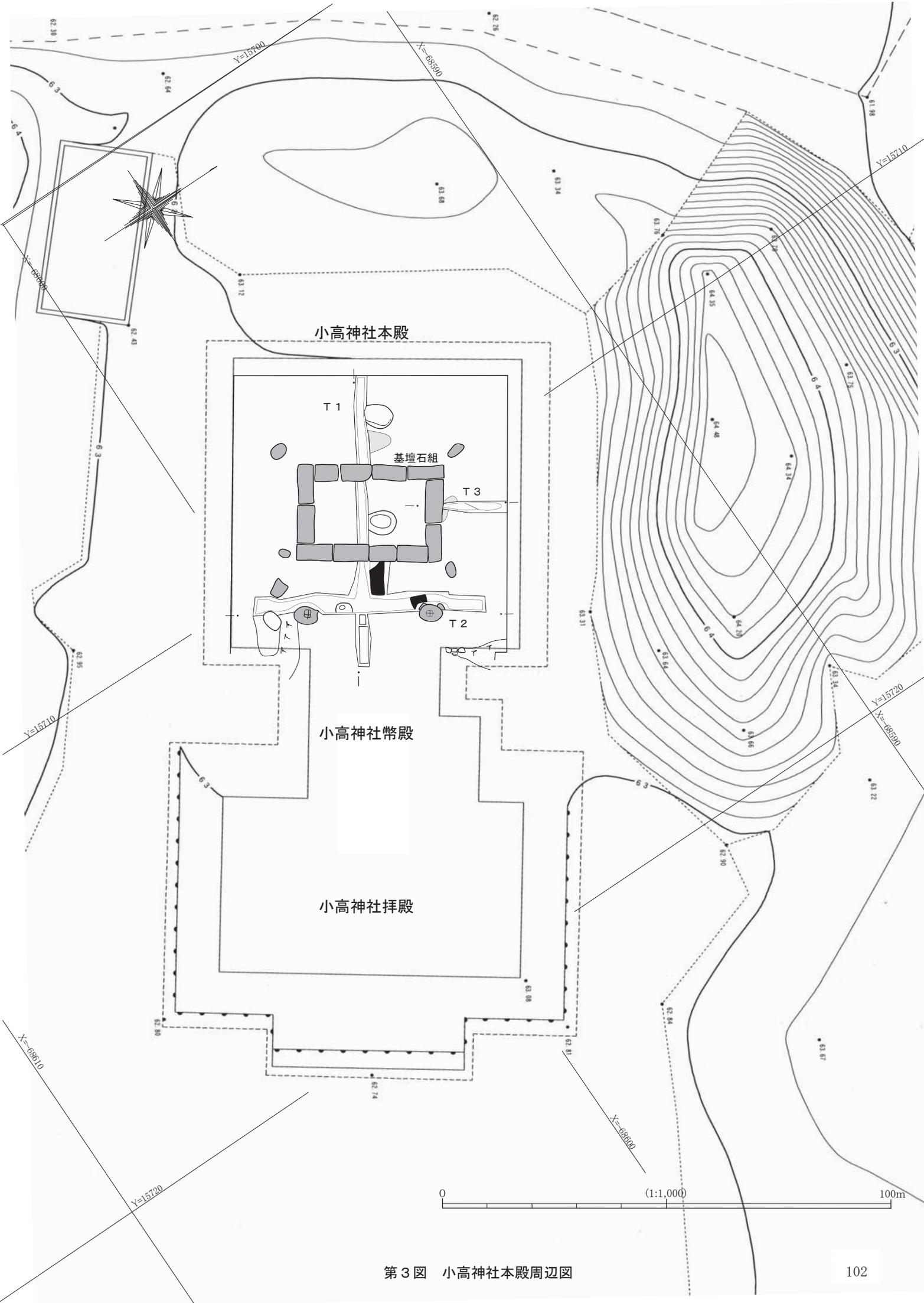
滝の口向台古墳群は、滝の口向台遺跡内にある古墳時代前期の古墳群で、十六基以上が存在しているとされるが、全貌は不明である。先述の滝の口向台遺跡調査の際に方墳四基と円墳一基の発掘調査と二基の測量調査が実施されている。うち、測量調査のみが実施された8号墳は、全長五十m・高さ五mの前壇付上円下方墳で、この8号墳を中心に大小の方墳がとりまわくような構成となっており、椿古墳群第3号墳とともに小櫃川流域の古墳時代出現期を考える



第1図 周辺の遺跡 (1 : 30,000)



第2図 上村古墳群測量図



第3図 小高神社本殿周辺図

上で重要な古墳群である。

第三章 調査の方法と概要

本殿下から石組の基壇が発見されたわけであるが、この基壇については新本殿の基礎となるという計画であったため、大きく破壊することは避け、一部のトレンチ調査を基本とした。トレンチは、計三か所設置した(第4図)。弊殿から本殿にかけて分断するトレンチをT1、本殿前に設置されていた二基の礎石を通るトレンチをT2、本殿東側のトレンチをT3とした。トレンチによる遺構確認面はソフトローム上面とした。全体で六m²/四十二m²の確認調査である。

基壇内については、表土である砂層を除去し、遺構の有無を確認した。本殿周囲については、雨落および旧覆屋の痕跡を確認するため、一部表土を除去して調査を行った。

調査の写真撮影は、三十五mmモノクロネガフィルムとカラーリバーサルフィルムを主として使用し、補助的にデジタルカメラを使用した。遺構の測量は平板を用いているが、基準点測量を行っていないため、既存の建物等に平面図を合わせた。

一．基壇石組

基壇石組は長軸三・二〇m、短軸二・一八mで十二個の長方形の切石(土台石)が組み合わされている。切石はすべて同じ寸法ではなく、大きいもので長さ一m、幅四十cm(石⑩)、小さいものでは長さ五十cm(石⑦)、幅も狭いものでは三十六cm(石⑩)とばらつきがある。切石の厚さも二十cmから十五cm程度と均一ではない。切石の上面は平らで、すべての石が同一レベルになるように設置してあるが、切石の底は平らではなく、概ね基壇内周側よりも外周側のほうが厚くなっている。中央に向かって盛り上がりがある地形に合わせたというのであれば、納得のいく構造である。

石組は、石①から時計回りに行っており、最後の石⑩は、石①と合うように

削って形を整えている。石組にかかる土の中には白色粘土と砂利を含んだ土で硬く締めている部分が見られた。切石の設置は、地山の上に玉砂利を多く含む土を載せ、その上に切石を置いて、基壇内に玉砂利を含む土等を敷き詰めて行ったものと思われる。なお、切石は石①から時計回りに石⑩まで番号を付けたが、図中では、煩雑となるため本文に記載のあるもののみ表記した。

二．基壇内

表土の砂層中には玉砂利が多く入っていた。この砂層を除去したところ、中央部南寄りにて、土坑状の掘り込みを検出し、精査を行った(SK002)。SK002は楕円形を呈し、長軸〇・六六m、短軸〇・五四m、深さ〇・一四m。砂層除去後の層(第4図土層2)は非常に硬く締められていたが、SK002の部分は掘りぬいたように軟らかく、しまりがなかった。基壇構築後に何かを埋納する目的で掘りぬいたものかと思われたが、SK002内からは開元通寶(第8図1)が一点出土したのみであった。開元通寶は外径三・四五cm、内径〇・六五cm、厚さ〇・一〇cm、重量二・九二cm。

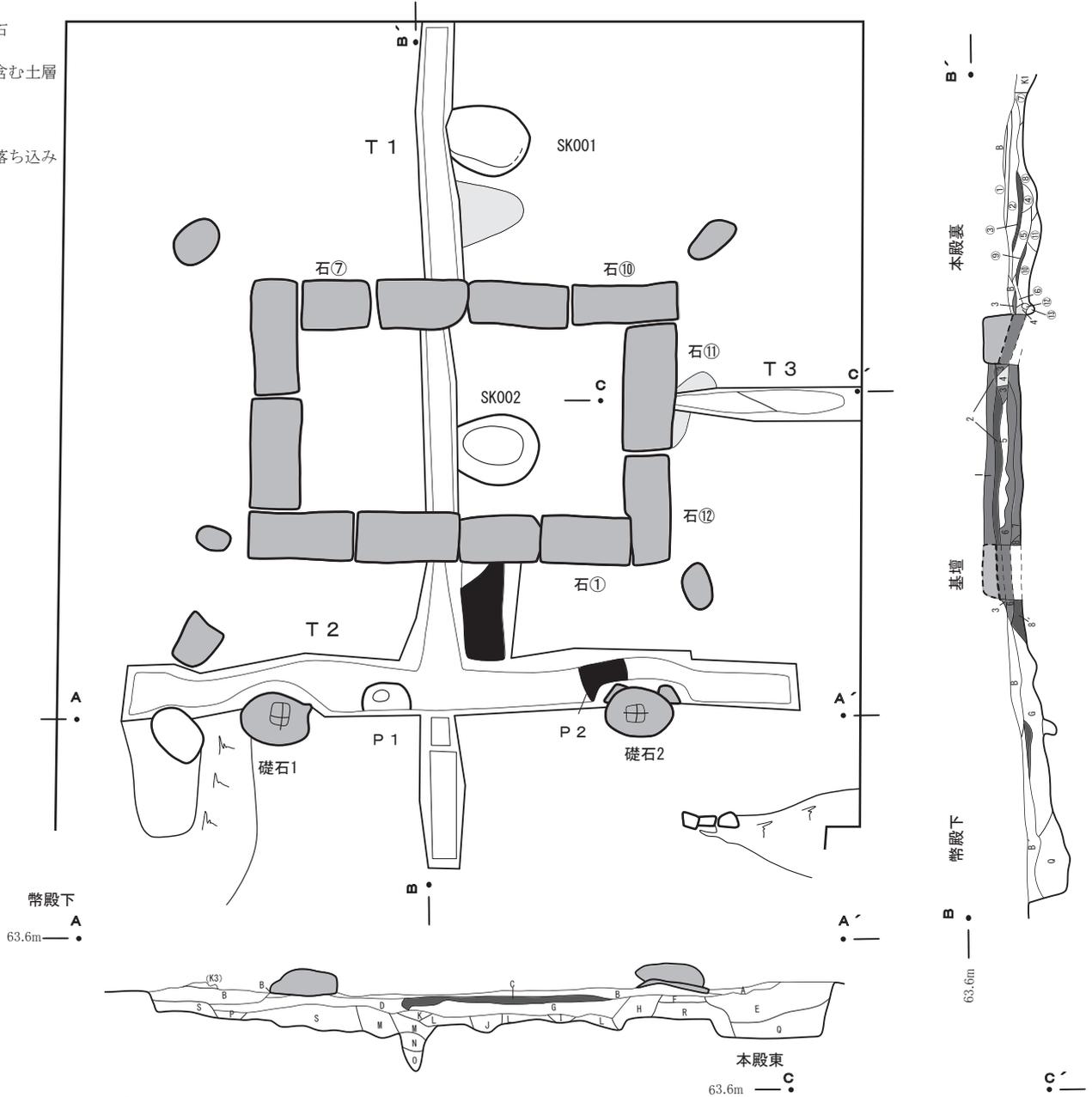
三．本殿前

礎石二基が現存する。西側を礎石1、東側を礎石2とする。礎石は丸石で、上面は平らであり、墨で十字が記されているほか、柱の当り痕跡が明瞭に残る。丸石の下は石の破材をかまかせて固定させている。T2内からは、ピットが二基検出できた。P1は直径〇・三四m、深さ〇・四五m、断面は逆円錐状で底面は狭い。P2は礎石2の下部から掘り込まれているが、精査を行っていないため詳細は不明。

T2からはトレンチ断面にかかる形で坏の底部片が出土した(第8図2)。坏の底部は回転糸切を残し、底径五・四cm、残存器高一・四cm。底部の八〇%程度の残存で、色調は橙色を呈し、胎土に雲母を多量に含む。

なお、弊殿下にあたる土は硬化が見られ、以前からの弊殿の存在を裏付ける結果となった。

- 白色粘土
- 切石・礎石
- 玉砂利を含む土層
- 硬化面
- ピット・落ち込み



基壇

1. 褐色砂 基壇表土。玉砂利を多く含む。
2. 暗黄褐色土 白色粘土多く含む。硬く縮まっている。炭化物・焼土多く含む。玉砂利含む。ローム粒子含む。
3. 暗褐色土 玉砂利を多く含む。しまりなし。
4. 暗褐色土 3層の一部。白色粘土ブロックを多く含む。
5. 暗褐色土 白色粘土粒子・ローム粒子多く含む。しまりあり。
6. 褐色土 部分的に玉砂利含む。ややしまりあり。
- 6' 褐色土 白色粘土粒(3mm)、ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子多く含む。硬く縮まっている。
7. 明褐色土 玉砂利少量含む。ローム粒子含む。しまりなし。
8. 暗褐色土 玉砂利多く含む。しまりなし。
- 8' 暗褐色土 白色粘土粒子・炭化物粒子・焼土粒子多く含む。硬く縮まっている。

本殿東

1. 褐色砂 基壇の表土。玉砂利多く含む。
- B. 褐色砂 表土
- (1) 白色粘土ブロック
- (2) 褐色土 白粘土多く混入。しまりあり。
- (3) 暗褐色土 しまりなし。
- (4) 明褐色土 色調地山に似るが、しまりなし。
- (K1) 覆屋建設による攪乱
- (K2) 根による攪乱

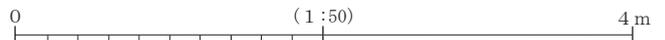
幣殿下

- A. 暗褐色土 しまりなし。
- B. 褐色砂 表土。しまりなし。
- B' 暗褐色土 ローム粒子・玉砂利含む。ややしまりあり。
- C. 暗褐色土 硬化している。ローム粒子・ローム粒多く含む。
- D. 暗褐色土 しまりなし。
- E. 暗褐色土 ローム粒子・ローム粒多く含む。しまりなし。
- F. 暗褐色土 ローム粒子・ローム粒多く含む。しまりあり。
- G. 暗褐色土 ローム粒子含む。しまりあり。
- H. 暗褐色土 ローム粒子・ローム粒含む。
- I. 暗褐色土 しまりなし。
- J. 暗褐色土 しまりなし。
- K. 暗褐色土 しまりなし。

- L. 明褐色土 ややしまりあり
- M. 暗褐色土 ローム粒子含む (nより少量)。
- M' 暗褐色土 ローム粒子多く含む。しまりあり。
- N. 暗褐色土 ローム粒子含む (mより多量)。
- O. 黒褐色土 しまりなし。
- P. 黒褐色土 しまりなし。
- Q. 黒褐色土 しまりなし。根に浸食されている。
- R. 黒褐色土 小ロームブロック(8mm) 多く含む。ローム粒子・ローム粒多く含む。ややしまりあり。
- S. ソフトローム
- (K3) 近年の建物の基礎

本殿裏

- B. 褐色砂 玉砂利含む。
- ①黄色土 しまりあり。
- ②褐色土 ローム粒(1mm) 多く含む。白色粘土粒子・炭化物粒子多く含む。硬く縮まっている。
- ③黒褐色土 硬く縮まっている。
- ④暗褐色土 しまりなし。雨落痕跡か。
- ⑤明褐色土 非常に硬く縮まっている。
- ⑥暗褐色土 白色粘土多く含む。硬く縮まっている。基壇4と似る。
- ⑦黒褐色土 しまりなし。
- ⑧明褐色土 ややしまりあり。
- ⑨黒褐色土
- ⑩明褐色土 ローム粒子・炭化物・白色粘土粒・焼土粒子を微量に含む。硬く縮まっている。
- ⑪褐色土 しまりあり。
- ⑫暗褐色土 ローム粒子含む。硬く縮まっている。
- ⑬黒褐色土 しまりなし。



第4図 小高神社本殿下基壇・トレンチ確認状況図

四. 本殿裏

現状では雨落あるいは覆屋の痕跡とみられる遺構は見受けられなかった。しかし、トレンチの断面を観察すると、現状の硬化面(第4図土層①)の下部に二面、黒色土の硬化面があり(第4図土層③・④)、あるいは前時代に建造物が築造された際の硬化面である可能性も考えられる。また、土層④は雨落のようにも見受けられる。他の土層との関係から推測すると、④層は前時代建物が機能していた際の硬化面の残骸であり、④層は宝永築造の本殿(現本殿)建設後の雨落痕跡、しかし間もなく本殿には覆屋がかけられ、その際に雨落部分を固めたのが③層と考えることもできるのではないだろうか。

本殿裏では、土坑状の掘り込みを1基検出した(SK001)。SK001は楕円形を呈し、長軸○・六四m、短軸○・五四m、深さ○・〇八mと掘り込みは浅く、出土遺物はなし。

また、白色粘土が広がっている箇所があったが、本殿築造との関連は不明。

五. 本殿東側・本殿周辺

本殿東側は基壇下から白色粘土の広がりが見られた。T3を設定しトレンチ調査を行ったが、根による浸食が激しく、雨落・覆屋等の確認はできなかった。

本殿の周囲には、四隅に礎石状の置き石が各一個配置されていた。

六. 玉砂利と礫石経

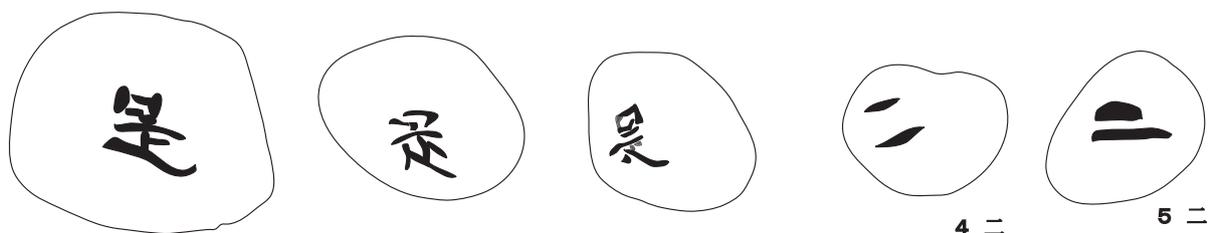
基壇内部の表面は砂と玉砂利が敷かれており、本殿周囲にも玉砂利の散布は見られた。また基壇内部の下層も玉砂利を多く含む層が見え、これらの玉砂利を採集し、精査したところ一部に墨書が記されているのが確認でき、書かれている文字から一字一石の礫石経であると判断した(第5〜7図)。当初、基壇の内外でしか玉砂利を分けていなかったため、礫石経の出土位置について特定するため、基壇上・基壇内下層・基壇周囲・本殿周辺などに分けて玉砂利の採集を改めて行った。この際、後の建造物に影響がないと判断できた基壇表

面の玉砂利についてはすべて採集した。基壇内下層についてはトレンチ断面から採集できなく限られた数の採集である。結果、多くの玉砂利が敷かれていた基壇内表面からは礫石経は全く検出できず、基壇内の③層から採集した玉砂利は高確率で墨書が確認できた。基壇周囲・本殿周辺から採集した玉砂利にも経石は見られなかった。出土位置を特定して採集できた玉砂利は全体のほんのわずかではあるが、以上の結果から、礫石経の埋納は、基壇の構築に伴い行われたもので、基壇の構築途中に埋納されていたことが推測できた。

今回、基壇内の玉砂利については、全体のごく一部しか採集できていないので、礫石経の総点数は不明である。解読を試みた経石は表1に記載した102点以外に、墨書はあると思われるが解読ができなかった石が161点あり、採集はしたもの初見で文字なしと判断した石は、さらにその十倍程度にのぼる。

七. 礫石経の内容

確認できた経石は、すべて一字一石であり、また断片的な調査であるので、經典の特定などは難しい。しかし、宝永二年(一七〇五)の本殿築造に伴って埋納したことがほぼ明らかであることから、近隣の事例より、木更津市中尾遺跡群東谷遺跡の礫石経塚が参考にできる。東谷遺跡では、同一の古墳の墳頂(第9号塚)と周溝(2号塚)に礫石経塚が構築され、墳頂部には元禄十一年(二六九八)と宝暦十三年(一七六三)の石碑が残っていた(以下、それぞれ元禄碑・宝暦碑とする)。元禄碑には、元禄十一年南呂十二日、上総州望陀郡中尾村寂照菴主沙門不管らにより、石に大乘妙典を写経する供養が行われたことを示す銘文が刻まれていた。宝暦碑は元禄碑が倒壊するなどしたため、宝暦十三年十一月に再建されたというものである。元禄碑の建立から六十五年後のことであり、人間が一人生まれ老死するに及ぶだけの年月が流れているが、中尾村民の礫石経塚への信仰心は消滅することなく続いていたものと見える。小高神社の礫石経も宝永二年の本殿築造に伴うものと考えれば、元禄碑建立からわずか七年後であり、同じ人物が関わっていたか、当時この地方に礫石経埋納の流行があったものかと推測できる。そのような視点で見ると、東谷礫石経塚



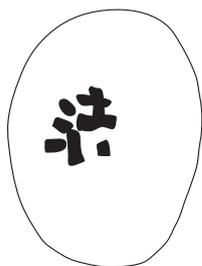
1 是

2 是

3 是

4 二

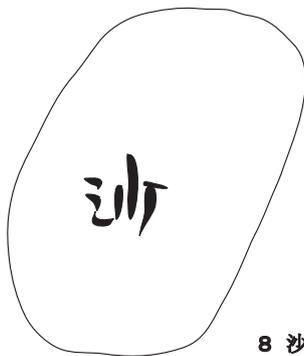
5 二



6 法



7 法



8 沙



9 沙



10 者



11 者



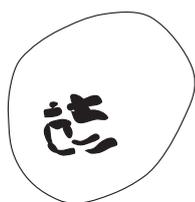
12 聞



13 聞



14 諸



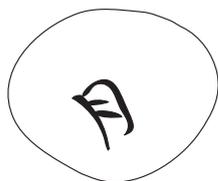
15 諸



16 不



17 不



18 月



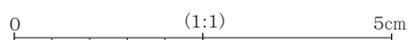
19 月



20 微?



21 微?



第5图 磔石经实测图(1)



0 (1:1) 5cm

第6図 礫石經実測図(2)



第7圖 磬石經實測圖(3)



第8圖 出土遺物實測圖

表1 礫石経観察表

図	No.	文字	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	図	No.	文字	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)
5	1	是	2.80	3.45	1.20	7	52	為	1.90	1.85	0.55
5	2	是	2.10	2.45	0.60	7	53	門	3.00	2.60	1.20
5	3	是	2.85	2.10	1.00	7	54	樹	3.65	2.00	0.85
5	4	二	2.20	1.70	0.50	7	55	阿	2.20	1.90	0.65
5	5	二	2.30	1.75	0.75	7	56	固	2.80	2.55	1.25
5	6	法	3.50	2.50	0.40	7	57	慈	2.95	2.00	1.05
5	7	法	1.30	1.50	0.60	7	58	滅	3.05	2.05	1.85
5	8	沙	4.60	3.20	0.70	7	59	身	1.70	1.20	0.55
5	9	沙	2.90	2.90	0.80	7	60	佛	3.55	2.50	1.10
5	10	者	2.50	2.30	0.95	7	61	界	2.15	2.10	1.00
5	11	者	2.10	1.70	1.30	7	62	聽	3.80	2.70	1.90
5	12	聞	2.80	2.40	0.90	7	63	威	2.60	2.20	1.60
5	13	聞	1.95	2.95	0.85	7	64	凡?	2.55	1.85	1.00
5	14	諸	2.30	2.70	0.80	7	65	須	3.45	2.75	1.20
5	15	諸	2.60	4.05	1.30	7	66	肆	2.35	1.55	1.25
5	16	不	2.05	1.30	0.60	7	67	梵	2.50	1.80	0.70
5	17	不	2.70	2.15	0.85	7	68	五	3.15	2.70	1.40
5	18	月	2.45	2.70	1.40	7	69	尽	2.45	2.00	0.80
5	19	月	2.30	1.70	0.75	7	70	薩	3.45	1.55	1.25
5	20	徳?	1.60	2.50	0.30	7	71	殊	3.20	2.55	1.75
5	21	徳?	2.40	2.15	1.25	7	72	天	1.25	2.25	2.60
6	22	中	2.40	1.90	0.60	7	73	別	2.70	2.20	1.00
6	23	今	1.90	2.20	0.70	—	1	火?	3.25	2.40	0.85
6	24	経	1.70	1.50	0.50	—	2	得?	3.95	1.60	1.15
6	25	何	1.60	1.85	0.35	—	3	是?	2.50	1.70	1.05
6	26	書	3.70	2.20	0.60	—	4	力?	2.00	1.60	1.00
6	27	入?	2.10	1.20	0.60	—	5	方?	3.80	2.10	0.95
6	28	大か六	1.90	1.70	0.50	—	6	滅?	3.10	2.50	1.50
6	29	調	1.90	1.80	0.60	—	7	意?	3.70	2.35	1.15
6	30	賢	2.90	3.20	1.10	—	8	諸?	2.00	1.85	0.75
6	31	悔	2.15	1.40	1.00	—	9	厚?	2.20	2.20	0.90
6	32	意	2.20	1.80	0.80	—	10	妙?	1.95	1.50	0.85
6	33	畢	1.80	2.20	0.30	—	11	未?	2.90	2.45	1.15
6	34	有	2.00	1.70	0.70	—	12	億?	3.10	3.00	1.55
6	35	寺	3.10	2.00	0.55	—	13	取?	4.00	3.10	1.25
6	36	子	2.00	3.65	0.70	—	14	億?	3.75	3.40	1.70
6	37	近	2.30	3.30	1.00	—	15	思か界?	1.80	1.35	1.00
6	38	生	0.45	1.70	2.40	—	16	時?	2.95	2.10	1.00
6	39	十	2.30	1.75	0.40	—	17	佛か僧?	2.35	2.00	1.10
6	40	智	3.70	1.20	0.25	—	18	六か大?	2.20	1.90	1.10
6	41	耶	1.80	2.00	0.30	—	19	間?	1.70	1.15	0.50
6	42	福	1.60	1.65	0.50	—	20	線か偶?	3.65	2.75	0.90
6	43	聲	2.60	4.00	0.45	—	21	欲?	2.80	1.50	1.00
6	44	比	2.20	2.80	1.55	—	22	設?	0.85	2.30	0.85
6	45	衆	2.95	1.80	0.25	—	23	毛?	4.30	3.60	2.00
6	46	修	3.05	2.40	0.70	—	24	治か語?	3.15	2.50	0.90
6	47	妙	2.15	3.00	1.15	—	25	羅?	2.80	2.15	1.50
6	48	部	1.75	1.65	0.60	—	26	経?	2.00	1.80	1.30
6	49	百	2.60	2.40	1.30	—	27	沙?	3.75	2.95	1.30
6	50	相	2.40	1.90	1.25	—	28	有?	2.10	2.05	1.05
6	51	眷	2.55	1.40	0.60	—	29	能?	2.60	2.10	0.80

の経石の中には、小高神社の経石の筆跡と似て見えるものもあるように思える。文字は判読できた範囲では、是が三個、二・法・諸・聞・沙・月・者・不・徳？が二個ずつ見つかっているが、他は各一個である(第1表)。筆跡を見ると、細い筆でかなり小さな石に繊細な文字を書いている者と、太めの文字で大きめの石を選んで書いている者がいるのがわかる。また、その中間的な者もいるようであり、礫石経は、三人以上の人物が書いていると推測できる。

小高神社は神仏習合色の強い神社であり、本報告二〇・二二頁にもあるとおり、烏天狗像が残されているなど山岳宗教的な一面も持っている。本殿の築造に伴い地鎮などの目的で礫石経が埋納されたとしても不思議はない。

第四章 まとめ

今回の発掘調査では、前時代の小高神社の遺構は確認できず、覆屋の痕跡も検出できなかった。また、本殿が古墳の上に築造されたか否かも確認することはできなかった。しかし、基壇下および周辺で散見された白色粘土は、その分布状況から必ずしも基壇の構築に持ち込まれ使用されたとは言い難い部分があり、少量の焼土や炭化物も検出されたことから、白色粘土や焼土等は古墳や堅穴住居等の前時代の遺構に伴うもので、過去の小高神社築造の際に破壊されたとの見方もできなくはない。基壇石組についても、地山を平らに成形した後、上面・底面ともに平らな切石を使用したほうが作業は楽かと思われるが、わざわざ底面が斜めの石を用いて元の地形に合わせるかのように設置しているのは何か理由があったのだろうか。

小高神社本殿の周囲には現在でも古墳が残り、鎮守の森は神秘的な雰囲気醸し出している。初めて小高神社が鎮座した時には、すでに聖域とみなされていたのであろう。小櫃川を見下ろす高台に建つ神社は、川を往来する人びとからは目印となっていたかもしれない。川を行きかう船の様子も、対岸の横田地区も一望できる高台にある小高神社は、単に宗教施設としてだけではなく、さまざまな意味で拠点となっていた可能性がある。小高神社の北側は神職を代々

務めた筑紫家の屋敷跡であるが、かなりの面積があり宿坊等の機能も備えていたという指摘もある。いずれにしても多くの人が集まることのできる施設があったのは間違いないであろう。

明確な記載はないが、小高神社の所在する滝の口は近隣の大鳥居・吉野田・玉野・宮田とともに中世では菅生荘に属していたと推測でき、対岸にある畔蒜荘横田郷を監視できる位置であると思うのは考え過ぎであろうか。

小高神社は袖ヶ浦市内でも有数の古社であり、その歴史の詳細は未知の部分が多い。しかし幸いなことに、小高神社には多くの「遺産」がある。江戸時代から守られ、今回修復の行われた本殿もその一つであるが、長い間氏子の手によって守られてきた鎮守の森、板絵等の文化財、行事、古文書、そして氏子の篤い信仰心と誇り。これらを総合的に調査することは、小高神社と滝の口地区だけでなく、周辺地域の歴史解明にも有効となるであろう。

参考文献

- 小高春男・田村隆・加納実・神野信・笹生衛 一九九三『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群 一般県道君津平川線県単道路改良(幹線道路網整備) 工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
- 小久貫高史・高梨友子 二〇〇一『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書8 袖ヶ浦市椿古墳群』財団法人千葉県文化財センター
- 西原崇浩 二〇一一『千葉県袖ヶ浦市 滝の口所在古墳群発掘調査報告書 上 谷田古墳群 大作A古墳群 大作B古墳群 馬場作古墳群第6号墳』袖ヶ浦市教育委員会
- 桐村久美子 二〇一〇『平成二二年度千葉県袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 大竹古墳群向神納里遺跡 荒久遺跡第一〇次調査 上村古墳群』袖ヶ浦市教育委員会
- 西原崇浩・桐村久美子 二〇〇二『千葉県木更津市 中尾遺跡群Ⅱ 東谷古墳群・東谷塚群・東谷十三塚』財団法人君津郡市文化財センター
- 『袖ヶ浦市史 資料編1 原始・古代・中世』

図版 1



1. 基壇調査状況 (南東→)



2. 基壇正面土層 (南東→)



3. 基壇調査状況 (北西→)



4. SK002 完掘状況 (北西→)



5. T 1 断面 基壇部分 (北東→)



6. T 1 断面 基壇部分 (北東→) 北西端



7. T 1 断面 本殿裏部分 (北東→)



8. T 1 調査状況 基壇切石下 (北→)



1. 礎石 1 検出状況 (南東→)



2. 礎石 2 検出状況 (南東→)



3. 礎石 1 調査状況 (北西→)



4. 礎石 2 調査状況 (北西→)



5. T 2 調査状況 (北西→)



6. T 3 調査状況 (北東→)



7. P 1 調査状況 (北西→)



8. T 3 調査状況 (南東→)



1. 礫石經 (1)



2. 礫石經 (2)



1. 礫石經 (3)



2. 礫石經 (4)

袖ヶ浦市指定文化財

小高神社本殿解体修理工事報告書

二〇一四年三月二十五日 発行

発行

袖ヶ浦市教育委員会

千葉県袖ヶ浦市坂戸市場一、一

編集

袖ヶ浦市教育委員会

岩瀬建築有限会社

千葉県成田市大和田一六四

印刷

ワタナベメディアプロダクツ株式会社

千葉県木更津市潮見四、一四、四